



島根県立邇摩高等学校 平成三十年度卒業証書授与式 校長式辞

季節は確実に冬から春へと移りつつあります。新たな生命の息吹が感じられる今日の佳き日に、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、また多くの保護者の皆様のご列席をいただき、平成30年度の卒業証書授与式を挙行できますことは、大きな喜びであります。教職員を代表し、高いところからではございますが、心より御礼申し上げます。

ただ今、卒業証書を授与いたしました卒業生の皆さん、卒業おめでとう。君たちは本校総合学科の全課程を修了し、本日、晴れの卒業証書を手にする事となりました。この3年間、目の前のハードルを一つ一つ乗り越え、自らの限界に挑戦し、君たちは間違いなく成長してきました。これからも自分らしい生き方を模索し、自分の人生を力強く歩んでくれると信じています。

保護者の皆様、お子様のご卒業、誠にありがとうございます。今日のお子様の姿に感慨も一入のことと推察いたします。また、これまでの本校教育活動に賜った深いご理解と多大なるご協力に対しまして、改めて御礼申し上げます。

さて、卒業生の皆さんが入学してきた平成28年4月、私も教頭として本校に赴任してきました。そしてこの2年間は校長として皆さんの成長を見守ってきました。つまり、皆さんが過ごしてきた3年間、私も邇摩高校という同じ空間で同じ時間を過ごしてきたこととなります。壇上から見る皆さんの堂々とした姿に、私も感慨深いものがあります。皆さんの努力に敬意を表するとともに、改めて、これまで支えていただいたすべての皆様方の存在を忘れてはならないと感じています。

私はこれまで、心が通い合う温かい学校作りを目指し、一貫して皆さんに心の大切さを訴えてきました。本日、私が卒業生へ贈る最後の話として、「東京ディズニーランドのある日の出来事」という実話を紹介します。なお、ディズニーランドではお客様のことをゲスト、迎えるスタッフのことをキャストと呼ぶそうです。

～ある日、若い夫婦が東京ディズニーランドにあるレストランを訪れました。キャストは2人を席に案内し、注文を受けると、夫婦はなぜかお子様ランチを注文したのです。しかしマニュアルでは、子どもではないゲストにお子様ランチを提供することはできな

いことになっていたため、注文を聞いたキャストは戸惑いました。なぜお子様ランチを頼むのか尋ねたところ、夫婦は、今日が去年亡くなってしまった娘の誕生日だと告げました。お子様ランチを食べに行こうと約束していたものの、娘は亡くなってしまったのです。その約束を果たすために、夫婦はレストランでお子様ランチを注文したのです。それを聞いたキャストはマニュアルを破り、自分の判断で夫婦を家族用の広いテーブルへ案内し、子供用の椅子まで用意しました。そしてお子様ランチを提供したのです。～

皆さんはこの話から何を感じますか。自分がキャストだったらどう対応したと思いますか。マニュアルは絶対に守らないといけないものだから、どんな事情があろうとマニュアル通りに行動する人。自分だけでは判断できないから、上司や同僚に相談する人。このキャストのように、マニュアルを破ると厳しく注意される可能性があっても自分の判断だけで行動する人。一体どの行動が正しかったのか、私には判断できません。ただ間違いなく言えることは、この話に登場した人物の一人一人に心があり、心が動き、そして心が通い合ったということです。

この話には後日談があります。夫婦から次のような感謝の手紙が届いたそうです。

「私たちは、お子様ランチを食べながら涙が止まりませんでした。まるで娘が生きているように家族の団欒を味わいました。これから2人で涙を拭いて生きていきます。」

この手紙は、コピーをしてキャスト全員に配られ、多くのキャストが涙したそうです。そして、ゲストの笑顔のためにこれからも頑張ろうと全員で誓い合ったということです。

皆さんが生きていくこれからの社会は、少子・高齢化、過疎化、国際化、人工知能やロボットの進化など、様々な要因が交錯し、大きく変化していきます。私は、そんな時にこそ変わらず大切にしなければならないもの、それは人の心だと思っています。自分の心を大切にしてください。目には見えない他者の心に思いを寄せる努力をしてください。そして心を動かしてください。心を通わせてください。

それでは、卒業生一人一人の人生に幸多からんことを祈念するとともに、皆さんの力で心が通い合う温かい社会を築いてくれることを期待し、式辞といたします。

平成31年3月1日 島根県立瀬摩高等学校長 三島祐司

